

武蔵野市第六期長期計画策定委員会 作業部会（第11回）

日 時：令和元年5月24日（金） 午後7時～午後9時16分

場 所：市役所 811 会議室

出席委員：小林委員長、渡邊副委員長、大上委員、久留委員、栗原委員、
中村委員、松田委員、笹井委員、恩田委員

欠席委員：岡部委員、保井委員

1. 開 会

2. 議 事

（1）前回作業部会における委員指摘事項について

企画調整課長が、議事の流れについて説明した後、教育企画課長が学校ビオトープとスポーツ広場について、教育支援課長がインクルーシブ教育について、指導課長が武蔵野市民科と「生きる力」について説明した。

【委員長】 委員からの意見をいただきたい。

【A委員】 文部科学省が出している「生きる力」を見ると、子ども一人ひとりが力をつけていくことと読めるが、子どもの生きる力は、ともに生きる力であり、誰かに支えられることによって生み出される力でもある。最近の子どもは特に、短い言葉でのやりとりが増えて、人と対話する力が培われているのか、私は心配になることがある。これからの社会を生きていく上で大事なものは、丁寧に相手の話を聞いて応答する対話の力だ。そういうところを包み込んだ、武蔵野市らしい「生きる力」のようなものをビジョンとして持つことはできないか。

インクルーシブ教育の部分について、市民から、特別支援教育として分けられることに納得のいかないものがあるという意見や、分けないで育ち上がることの意味が相対的に軽視されているという意見が出されている。ともに育ち上がるということと、一人ひとりの教育的ニーズに沿った教育が提供されるということは、二本柱だと思う。しかし、武蔵野市で行われるインクルーシブ教育あるいは特別支援教育は、一人ひとりに合った教育内容を重視してまちの仲間としてともに時間を過ごすことや一緒に育つということが、柱とするには弱いのではないか。

【指導課長】 とともに生きる力、支えられることでの生きる力は、他人と協調し、他人を思いやるということであり、これは「生きる力」の3つのうちの「豊かな人間性」に含まれる。また、困っている友達がいたら、一緒に考

えて、支えていくというのは「確かな学力」、積極的に課題に対応して解決していくという部分に相当するし、「たくましく生きる」という意味からいけば、健康ということも含まれるので、ともに生きるという要素も「生きる力」に含まれる。

【教育支援課長】 インクルーシブ教育について、私も今はともに学ぶ場が少ないと感じている。ただ、特別支援学級などはこれまで、同じ学校の中にながら通常の学級と離れた場所に配置をしてきたが、最近では、第三小学校の特別支援学級を通常学級との並びで配置し、休み時間など日常生活で交流ができるような取り組みをしている。特別支援学級が設置されている中学校では、生徒会の交流委員会で、生徒が企画して、障害のある子と一緒に調理実習をするといった取り組みをしている。教員に対しても、研修だけでなく、交流及び共同学習の場を増やし、教員の意識、理解を深めていく。

【副委員長】 管理できていないビオトープがあるという意見があり、建てかえまでどうするのが気になっている。建てかえの方針で、全校にビオトープを設置するのは難しいかもしれない。ただ、今あるビオトープについては、教員が維持管理していくことは無理だということは共有しているが、地域の意見を勘案しながら、どう使っていくのか。

インクルーシブ教育については、私自身は、まず教員への研修の機会を設けることが重要だと思うが、それはこれまで行ってきたのか。行ってきたのであれば、それは方法がまずかったことが考えられる。

【教育企画課長】 ビオトープは、定期的な管理を委託契約している。ビオトープの質、日ごろの管理が学校によって差があるという実態があれば、委託の内容を変えることも含めて今後、研究していきたい。

【教育支援課長】 特別支援教育が平成 19 年度に導入されて、それから 10 年たった。この間、全ての学校に特別支援教育コーディネーターを配置し、校内でも研修を行い、教育委員会でも研修、情報交換を積み重ねている。ただ、実践の場が少し足りなかったと感じているので、その実践の場を後押しできるような施策を今後検討して、実施していきたい。

【B 委員】 武蔵野市民科の関連で、私は、シビックプライドは大事だと思う。地方創生の一番の原動力は、住民のまちに対する愛着やプライドだ。シビックプライドは、今回大きなキーワードで最優先事項の 1 つだ。

武蔵野市民科は学校教育に位置づけられている。市という大きなフレームワークで独自性を出すのは難しいのか。武蔵野市の教育としてコントロールがしづらいとすると、そもそも教育でシビックプライドを打ち込もうとする

ことが間違っていると理解する。例えば、山口県は、萩市を初め各市で吉田松陰の教えを暗唱させるまで勉強させて、シビックプライドを醸成している。武蔵野市民科がそういうものではないというのであれば、どこかでシビックプライドを強調していかなくてはならない。

シビックプライドは計画案では行・財政のシティプロモーションの項で少し触れているだけだ。行・財政で、シビックプライドは必要だから取り組んでいくと書くとした場合、もう一回、武蔵野市民科に位置づけることは難しいのか。やはり行・財政のところだけになるのか。ほかに書く場所があるとしたら、それはどこかについて、委員会で議論したい。

【指導課長】 武蔵野市民科の学習の中で武蔵野市のすばらしさに触れ、子ども自身がそのことに誇りを持っていくということは当然ある。ただ、それを第一義とした学習活動という設定はしていない。

【B委員】 市民性を育成していくこととあわせて、例えば子どもたちに武蔵野市への愛着を教えていくことにも活用するという書き方はできないか。

【指導課長】 市民科の学習を通して子ども自身が愛着のようなどころにより強く思いをいたしていくことはあっても、教え込むものではないと思っている。子どもたちがみずから探求活動をする中で、武蔵野市のよさに気づいていくというのは、昨年度も試行的な学習の中に取り入れられ、境南小の子どもたちが自分たちの活動を発信するなどしている。

【副委員長】 武蔵野市は、萩市のようなものはないが、武蔵野市のあり方を考えることを市民科カリキュラムの教材としてふんだんに入れていけば、B委員の言う市民性の涵養という目的にも合うのではないか。市民科のカリキュラム作成委員会でいただいた資料にある「境南とことん研究所」や「大町市・白馬村から武蔵野を振り返る」など、市を内外から考える教材をたくさん取りそろえて指導計画案として地域レベルで共有するといったのではないか。

【B委員】 地域を元気にさせていくときの最もベースになるのは愛着と誇りだ。武蔵野市の魅力を磨くことはすばらしいのだという意図を持ってメッセージとして伝え、気づかせていくという能動的なアクションまで踏み込まなければ、地域アイデンティティーやシビックプライドは形成されない。シビックプライドの今の計画案における位置づけは余りにも弱い。この辺に入れたらどうかとか、そもそもそれは入れるべきではないということも含めて市の職員、委員の皆さんの意見を踏まえて方針を決めていただければ、具体的に検討することができる。

【委員長】 私たちは、特段にシビックプライドということを言われてきていないし、愛着を植えつけられてきたわけでもないが、今こうして武蔵野市

のために一生懸命頑張ってしまうのはなぜかということも考えなければいけない。地方では都会に出てしまう人が多い中で、世の中でシビックプライドが問題になっているのもわかるが、その大切さをどう伝えるかは難しい。

【B委員】 市民意識調査を見ると、武蔵野市に対する愛着に低下傾向があらわれていると思う。これは決していいことではない。愛着を持ってもらうには、武蔵野市と市民は何をしなければいけないのかを考える必要がある。シビックプライドを行・財政分野でさらに書き込む余地があるかどうか、行・財政分野のワーキングに預らせていただいて、素案という形で皆さんにお諮りしたい。

【A委員】 シビックプライドについては、以前も委員会で意見を交わした。委員の皆さんは私と同様、まちにかかわることを通して、このまちを何とかしようという思いが強いと思う。私の関心領域でもあるコミュニティや市民活動といった部分には、人とつながるとか、まちの活動にかかわったりすることを通してシビックプライドと呼ばれる愛着や誇りみたいなものがある。これもまちづくりの1つだとすれば、平和・文化・市民生活のところに書いていくこともできるのではないか。

インクルーシブ教育については、10年計画なので、これからこんなふうにしていきたいとか、もう少しこういうことを増やしていきたいとか、一緒に何かするという部分について力を注いでいきたいという、ある種の方向性、目指す姿みたいなものを書き込むといいのではないか。インクルーシブ教育に関する「障害のある者と障害のない者ができるだけ同じ場で学ぶことを追求する」という説明は、追求する方向性を大事にしていることがよくわかって、いいと思う。

ビオトープの維持に子どもが余りかかわっていないことに少し驚いた。まちの中で自然に触れる機会の少ない子どもがビオトープにかかわって、箱庭のような自然でも大事にしていこうという教育というか心の醸成のようなことは、とても意味があるという方向でビオトープのことを考えていけるといいのではないか。

【C委員】 愛着心が下がっていることが、市民が増えたことと関係しているとすると、新しい住民に対して愛着心を持ってと旗振りをするよりは、まだまだ増えることが予想される新しい人たちにもゆっくりシビックプライドを涵養してもらうにはどうしたらいいかという方向に持っていくほうがいいのではないか。

【D委員】 シビックプライドは、A委員が言うように、生活圏域の中で醸成されていくものであって、市の中が生活圏域である小中学生が、教育の場面で武蔵野市を考えるというのは、すばらしいことだ。それが成長の過程で

どう残るかは、個々人の価値観の問題でもあるので、副委員長がおっしゃるようなことでいいのではないか。まずはB委員に書いていただいて、検討していきたい。

【委員長】 シビックプライドの文案はB委員にお願いします。ビオトープは、NPOの人たちが来てくださって、用務員さんも一緒にという開かれた形で管理しているのであれば、そこに子どもたちもかかわれる仕組みにして、先生は介在しないでやれると、もっといい。

【D委員】 身近な自然の観察は大事だし、学校だけでなく、家庭、地域、社会全体で子どもたちの教育のためにビオトープを維持していくということが言えればいいのではないか。維持管理ができないからというロジックではなくて、大事だと市が認識してつくったのであれば、大事にしていきたい。その方法論をどう考えるかはまた別問題だ。

【C委員】 ビオトープは、保護者の中には、望ましいと思う人たちが大勢いる反面、苦情を申し立てる人たちもいる。望ましいことだけを前面に出すのではなく、保護者の理解についても考慮したほうがいい。また、池で遊びたい子どもと、荒らされたくない管理側という難しい面もある。

【E委員】 ビオトープを置くにしても、学校の教育池なのか、小さい自然としての箱庭やアクアリウムのようなものなのかがはっきりしない。そのことについて、教育委員会はどう考えているのか。

【教育企画課長】 単なる池というよりは、人工的なものではありながら小さな森的な自然であり、それを学校の中に置くことで子どもたちにもいい影響が出ている。ある学校では、ビオトープの池の水を抜いてみたところ、ザリガニが繁殖していた。その事実を知った後は、ビオトープをしっかりと管理していこうという話になったと聞く。活用の仕方次第だが、好事例は教員たちとも共有していきたい。

【委員長】 事例を知らせることは大事だ。学校の先生は、学校をかわるので、最初に設置したときの理念みたいなものが次第にわからなくなっていく。何らかの形でそこを共有できるようなサポートを教育委員会でしていただけないのではないか。維持管理に全員を参加させる必要はなく、虫の苦手な子もいれば詳しい子もいるのと同じで、興味のある子に手伝わせるということでもいい。何かを少し変えるだけで、うまくいっていないことが、うまくいくものだ。サポートできるところはぜひ上手にサポートしていただきたい。

【E委員】 スポーツ広場について。「第五期長期計画・調整計画に記載し

ているため、第六期長期計画には掲載しないというのは、実施しないとの誤解を招く」という説明は、いかがなものか。武蔵境圏は、スポーツをする場所がないということで施設利用を熱望する市民もいる。期待を持たせるのではなく、すぐにはできないという、明確な理由で説明してはどうか。

【教育企画課長】 この説明は、正直なところ、非常に難しいと感じていた。スポーツ広場を設置するという方針と、学校改築の方針、それぞれが固まっているので、どうしてもこういう説明になる。

【E委員】 書いていなくても、やることが決まっているのであれば、「なぜ六長には書いていないのか」と聞かれたときに、「10年以内での六長の期間中での実施は難しい」と言えるのではないか。

【教育企画課長】 子どもの数が増えていくという状況は、五長調のときから現在に至るまで変わっていない。学校改築がどうなるかも変わっていない中では、六長では基本的に第五期長期計画・調整計画に近い書きぶりをするのがいいのではないかというのがこちらの考え方である。

【副委員長】 第五期長期計画・調整計画の「整備を検討する」から、今回は「整備する」で、「検討」が消えている。「検討」の文字を残すわけにはいかないのか。

【委員長】 「検討を続ける」とするのはどうか。

【副委員長】 六長の10年間でということもあるが、実際にやるとしても、もう一回、検討はすると思うので、「広場として整備を検討する」とすれば、再考の余地もできる。第五期長期計画・調整計画で「検討する」が入っているため、その連続性に照らして「検討する」としてよいのではないか。

【教育企画課長】 「整備する」と言い切ってしまうているが、副委員長のおっしゃるとおりだ。今の状況では「検討する」が実態に一番近い。書きぶりは考えさせていただきたい。

都市整備部長が、ハーモニカ横丁の歴史的経緯と現状及び課題について説明した。

【B委員】 ハーモニカ横丁は武蔵野市の特徴であり、人気の場所ではあるが、法的なところがグレーゾーンであるため、実務的には書かないほうがいいということか。

【都市整備部長】 防災上の課題があるため、行政側のやるべきことは何らか掲げていかなければいけないと思っている。

【企画調整課長】 現在の修正案では「ハーモニカ横丁をはじめとした吉祥寺ならではの魅力を有しており」として、その後段で建物の耐震性や老朽化

等の課題について記載している。

【B委員】 この書き方でいいと思う。私は納得している。

【委員長】 ハーモニカ横丁は防災上の問題があり、非常に危ないと言われている。かつてのシャッター街のような状態にあったのを再生させたのはすごいと思うが、あの限界がきれいになると、観光客が激減するようなことになるのか。

【B委員】 絶対激減すると思う。戦後のバラック街から始まったような屋台は、防災上の問題からクリアランスをかけるが、その瞬間に人気はガクッと落ちる。高知のひろめ市場は商店街の一番奥にあり、カツオの土佐づくりの実演販売というキラコンテツがあるので、特異な例と言える。観光客を呼ぶ高知の朝市も、衛生面は結構グレーゾーンだ。しかも、公有地である道路を既得権益として使っている。東京はそういう場所を全部潰して、荻窪でさえ再開発ビルにしてしまった。外国人にとっては、羽田空港から直結した東京のまち・吉祥寺は、日本的でワイガヤな場所があることがアメージングだとして、人気の的となっている。

【F委員】 ハーモニカ横丁は、4つの商店会から成る。火災報知設備を引く調整や共同作業が進まない状態にある。20年前には、開発公社が中心となり、ハーモニカ横丁のまだ若いオーナーを集めて勉強会を開いたこともあるが、最終的には現状維持ということになっている。ハーモニカ横丁は、建築の問題、違法性の問題、権利者の問題、様々輻輳する中、人気が出てしまったところがあるので、長計としては、課題があるというところを示唆した書き方をするのがいいのではないか。

【委員長】 吉祥寺に住む者としては、衛生面が気になる。観光客がたくさん訪れるような魅力を持ち続けてほしいが、新潟の火事のようなことがあれば、一瞬で観光地がなくなってしまう。防災や衛生面について、思い切ったことをするべきときが来るのではないか。いずれにしても、今後とも安全・安心で衛生的なハーモニカ横丁をお願いしたい。

企画調整課長が前回の作業部会における委員意見と対応方針について説明した。

【委員長】 個別の意見は後刻事務局に言っていただくこととして、策定委員会として議論すべき点についてのみ確認する。

まず、スクールゾーンを追記する件について。昨今、保育園児や通学中の児童が交通事故に巻き込まれるということが相次いでいる。武蔵野市は子育

て応援を前面に出していることもあり、この件は特出しで追記しても構わないと考える。

【事務局】 スクールゾーンはエリアによって特性があり、対応方法も様々だ。通学路等お子さんたちが通るところを大切に思っているという方向の記載とする。

【B委員】 目的はしっかり書いてほしい。「児童・生徒が通学している道路の交通安全に関しては、注力して安全を確保していく」とすればいいのではないか。

【委員長】 「絆」は言葉が強過ぎるのではないかという意見について。これはA委員に検討していただくことになっていた。

【A委員】 「絆」ではなくて「つながり」を提案したが、「このまちにつながる誰もが」で「つながり」という言葉があるので、適切ではないということになった。「地域の結びつき」でいいのではないか。「絆」は非常に強い何かを感じる。

【委員長】 3.11以降の流行語という言い方もできる。

【B委員】 3.11のときに、国の支援が来るまでみんなで助け合い、国の支援が来た後は各地から物資が送られて、みんなで助けるというメッセージが届けられた、それが「絆」なので、ニュアンスとして強いものを感じるかもしれないが、防災的な安全性を高めていかななくてはいけないという市民の今の問題意識に合致した言葉だと思う。

【副委員長】 専門用語を使うと、「社会関係資本」などがあるが、全く通用しないので、「絆」でいいと思う。

【委員長】 重点施策の(1)に「武蔵野らしさ」が弱いことについて。

【C委員】 具体的な文案があるわけではないが、(1)以外の重点施策は、武蔵野市だからこうだというのが入っているのに、(1)は「武蔵野市ならではの」と書かれているだけで、文中には武蔵野市らしいことがない。

【企画調整課長】 重点施策(1)は、「武蔵野らしさ」として、国の「地域共生社会」にはない外国人を含めている。

【事務局】 武蔵野市は「地域リハビリテーション」の理念で、教育の分野とも連携して取り組んできた。「教育」を入れているところも武蔵野市らしさと言える。国が言う「地域共生社会」は、高齢者、障害者、子ども・子育て家庭、生活困窮者など縦割りになっていたのを丸ごと支え、地域の人もかかわって「我が事・丸ごと」でやっていこうということをいう。武蔵野市は、さらに、教育分野とも連携して取り組み、外国人も含めているのが大き

な特徴だ。

【委員長】 (2)「子どもと子育て家庭を切れ目なく支援する体制の確立」も「武蔵野らしさ」が出ているとは言えない。強いて言えば「切れ目なく」が「武蔵野らしさ」ではあるが、ここは、いっそのこと、国よりも広いということ強気で書いてはどうか。

【副委員長】 この文章だと独自性は感じないが、武蔵野市は、例えば妊娠期の手帳をもらうときから相談体制を組んでいるし、出産後の家庭訪問をする。都市部のこの規模の自治体で助産師が全部の家庭訪問をするのは大変なことだ。これを「武蔵野市らしさ」として、きめ細かさを強調する。やるべきことをしっかりやるということが前面に出ていれば、武蔵野市しかない子ども・子育て支援をあえて打ち出す必要はない。

(2) 計画案素案（関連資料）について

【委員長】 図と、重点施策についてはどのようにするのか。

【企画調整課長】 重点施策と基本目標、基本課題、分野ごとの施策のマトリックスという形にしている。1つの図にするには複雑過ぎるので、巻末につけて、この前後の関係が見える形にしたい。

【委員長】 このマトリックスでは、どれが重点施策かがわからない。目標に重点施策がどうつながるかもよくわからない。これは、計画案に載せることを想定しているのか。

【企画調整課長】 載せることを想定している。

施策の体系表は、今日あくまで参考としてつけた。各部ヒアリングの際の事業企画書をベースに記載し、最終的に計画が冊子になるときに掲載するが、計画案として公表する時点では「基本施策」と「施策」までと考えている。事業名が見えてしまうと、市民意見交換会で微細な話になりかねないためだ。

用語説明は、討議要綱の「用語説明」をベースにしたものを巻末につける。

(3) スローガンについて

スローガンの策定委員会案について、挙手により絞り込みを行った。

(4) その他

企画調整課長が、第13回第六期長期計画策定委員会及び計画案公表までの流れについて説明し、第11回作業部会を閉じた。

以 上